

大雨と降ひょうに対する農作物の技術対策について

令和4年7月12日
農林水産部担い手支援課

銚子地方気象台の発表によると、千葉県では、12日夕方から13日の明け方にかけて、雷を伴った激しい雨が降り、大雨となる所がある見込みです。大気の状態が不安定になることから、降ひょうの可能性もあります。

については、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

1 ナシ

<事前対策>

多目的防災網を展張し、被害の発生を未然に防止する。

排水条件の悪い園では滞水しないよう排水対策を実施する。

<事後対策>

(1) 薬剤散布

ア 新梢や葉が損傷している場合

胴枯病予防のためトップジンM水和剤 1000 倍液（前日/6回）もしくはベンレート水和剤 2000 倍液（前日/4回）を散布する。薬剤散布は可能な範囲で早めに実施する。

イ 枝や幹に被害がある場合

直ちに枝や幹の損傷部に保護殺菌剤トップジンMペースト（剪枝時/塗布3回）を塗布する（※折れた枝は切り返してから、塗布する）。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する。

(2) 棚の保護

降ひょう量が多く、多目的防災網に積もった場合には、多目的防災網を切るなどして、棚を保護する。

(3) 被害樹の管理

下記の被害程度に応じて着果量を制限する。

ア 激甚被害園（残存している葉の損傷が70%以上、または、落葉30%より多い）
⇒全ての果実を摘み、樹勢回復に重点を置く。

イ 甚被害園（残存している葉の損傷が50~70%、または、落葉程度30%以下）
⇒被害程度に応じた着果量調節

a 落葉程度30%の場合……平年の40~60%の着果量にする。

b " 20% " …… 60~70% "

c " 10% " …… 70~80% "

ただし、樹勢が低下している園では、被害程度に関わらず全果実を摘む。

- ウ 中～軽程度の被害園（葉の損傷はあるが、落葉はほとんど認められない）
⇒傷の状態が確認できるようになってから、傷が少ない果実を残すように摘果する。被害果が多い場合においてもむやみに被害果を摘果せず、今後の仕上げ摘果に向けて順次摘果を進める。
- （４）園が滞水した場合は速やかに排水を図る。

2 施設共通

<事前対策>

- （１）排水状況を確認し、排水溝の整備に努める。
- （２）外部遮光ネットが展張できる場合は、事前に展張し、降ひょうによる損壊被害を軽減する。
- （３）施設の閉鎖が必要な場合は、換気扇を活用するとともに、温度上昇を最低限に抑えるよう、風向き等に注意しながら側窓の開閉を調節する。

<事後対策>

○排水対策

- （１）施設周辺に湛水している場合は、速やかに排水路を掘り、排水に努める。
- （２）ハウス内に雨水が流入した場合は、できるだけ速やかに排水し、水が引いた後に、ベッドを整形するとともに中耕する。
- （３）ハウス内への雨水の流入等により、内部が多湿になって病気が発生しやすくなるので、防除指針に従い殺菌剤を散布する。また、根の活性が低下するなど薬害が発生しやすい状態にあるので、薬剤散布は、高温となる時間帯を避け、適正な散布量とする。

○降ひょう対策

- （１）降ひょうによって施設が破損した場合は、安全を確保したうえでビニール等の損傷箇所を早急に修理する。
- （２）施設の閉鎖に伴う温度上昇により病気の発生が懸念される場合は、殺菌剤の散布により病害の発生を防止する。また、液肥の葉面散布等により生育の回復に努める。

3 野菜

<事後対策>

（１）野菜共通

○排水対策

- ア 速やかにほ場の排水を図る。
- イ 栽培中の作物には、防除指針に従い殺菌剤を散布し、病気の予防に努める。根の活性が落ちるなど、薬害が発生しやすい状態にあるので気をつける。
- ウ 栽培中の作物では、土壌の表面が乾いてきたら、追肥用化成などを用いて追肥を行い、軽く中耕を行うことにより、生育の回復を促す。

○突風・降ひょう対策

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する（カッコ内は病原菌の生育適温）。

炭疽病（22～28℃）、疫病（28～30℃）、べと病（20～25℃）、つる枯病（20～24℃）、褐色腐敗病（28～30℃）、軟腐病（30℃）

（2）すいか・メロン

果実や茎葉に損傷を受けた場合は、薬剤散布を行うとともに、薄めの液肥を葉面散布し、草勢の回復に努める。

（3）食用とうもろこし

被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や速効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

（4）ねぎ類・にら

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。株が倒伏した場合は、天候とほ場の状態の回復を待って、丁寧に起こす。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。収穫期にあるにら畑では、葉の損傷がひどく、出荷が困難な場合は早めに損傷葉を刈取り処分し、新たに葉の伸長を促す。

（5）露地野菜一般（ショウガ、サトイモなど）

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤を散布する。また、草勢の回復を図るため、草姿に回復の兆しが見られはじめたら、葉面散布剤や速効性の肥料を散布する。

4 水稻

<事前対策>

（1）排水路の詰まりの点検・補修を行い、冠水や滞水に備える。

<事後対策>

（1）水稻の生育は穂ばらみ期～出穂期にあり、長時間冠水（株全体が水につかる事）した場合は、水温が高いほど、また水が濁っているほど冠水による被害が大きくなるので、早急な排水を行う。

（2）白葉枯病の常発地では、浸水（葉鞘や穂が水面から出ている事）、冠水した場合に発生する恐れがあるので、薬剤防除を行う。

（3）これまでの天候で下葉にいもち病が発生している圃場が見られる。冠水した場合、感染が拡大する可能性があるため、必要に応じて薬剤防除を行う。

（4）降ひょうにより、稲体が傷ついた場合は浅水で管理し、根の機能を高める。

5 大豆

<事前対策>

- (1) 排水の悪いほ場では、あらかじめ排水溝などの整備をして、冠水や滞水に備える。特に水田転換畑では滞水しやすいので、排水溝を確実に排水路につなげる事や、畦畔を切る等で早急な排水対策を行う。
- (2) これからは種を予定している場合、出芽時や生育初期の湿害は苗立ち不足や初期生育が著しく劣ることになるので、天候の回復を待って圃場が乾いてから播種を行う。

<事後対策>

- (1) 生育中のほ場では、土壌が乾くのを待って、中耕・培土等により草勢の回復を図る。
- (2) 冠水や滞水により、出芽時や生育初期に著しい湿害を受けた場合、まき直しも検討する。その場合、生育の遅れを補うため播種時期が遅くなるにつれて播種量を増やしていく。

6 落花生

<事前対策>

- (1) 排水の悪いほ場では、あらかじめ排水溝などの整備をして、冠水や滞水に備える。

<事後対策>

- (1) 落花生の生育は開花期となっており、この時期の湿害は莢数の減少につながるため、早急に排水を行う。
- (2) 滞水した場合、病害が発生しやすくなるので、よく観察して必要に応じて防除を行う。
- (3) ほ場が乾くのを待って、中耕等により草勢の回復を図る。